

聞書 一名鈴木三郎重家物語

一、概説

当部に『聞書』と題し、別名を『鈴木三郎重家物語』と称する写本一冊を所蔵する。本書は表題に示すように源義経の従臣で奥州高館において討死したと伝える鈴木三郎重家の物語である。兄頼朝に討たれた非運の英雄義経に対する人々の愛惜の念は、判官最原の物語伝説を生み、また、主君と運命を共にした人達の物語伝説も同様に生まれた。その中でも静、弁慶などに関する物語伝説などは頗る多い。しかるにその他の家来達については、その数も少なく、幾つかの作品が幸若舞曲、謡曲、狂言などに見出される。

本書は、既に廃曲となった謡本の『語鈴木』の内容、文体、語句に類似するところ極めて多く、謡本との密接な関係も認められる。この物語の作られたと思われる時代は、物語と幸若舞曲、謡曲、狂言、古浄瑠璃などとの中間的な作品も存在したので、本書もこうした作品の一つかとも考えられる。本書の外に、鈴木三郎重家を扱った作品としては、謡本

『追駈鈴木』、『追熊鈴木』、狂言『生捕鈴木』、『繩鈴木』、『鈴木』などがある。

本書は転写本ではあるが、これら謡曲、狂言、幸若舞曲などの語り物的な芸能の分野に属するものに頗る近い性質を有するので、今後中世物語、謡本などの研究に資するところ大なるものと思われる。翻刻に当っては、本書を底本とし、謡本『語鈴木』をもって対校した。

二、書誌

本『聞書』(五〇八一―九二)は、大きさ縦二一・〇糎、横八・五糎。袋綴紙釘装一冊の袖珍本である。料紙は第一紙から第五紙までの五枚が鳥の子紙、第六紙から第九紙までの四枚が楮紙。表紙も鳥の子紙で表が片輪車、裏が草木の模様が摺られている形跡があるが、その部分が剥落し、全容は判然としない。表紙中央部に「聞書」と直に書き、本文は一面八行、一行二〇字前後、墨付九枚。表裏見返に本文同筆で和歌一首ずつを記す。巻末に「わけみへかたくおかしく候へく候、ほんのまゝにうつし

候已上、すゝきの三郎しけいへてん」と書写奥書がある。これによれば正しくは『鈴木三郎重家伝』と題すべきか。書写年代及筆者の記載はない。室町期の書写と思われる。作者、成立年代は不明。本書は、静寛院宮の御生母経子の御生家である橋本家より、昭和十二年三月十五日同家旧記類並に有職故実などに関する文書類千五百点余りを、宮内省に献納された。その献納目録中に「聞書（袖珍本）足利もの一冊」とあり、もと橋本家架蔵本である。

三、内容

さきに述べた如く、謄本の『語鈴木』、『鈴木』などと語句の異同出入は、認められるものゝ、内容は同一のものと思われる。その梗概は、源義経の家来の鈴木三郎重家は、紀州熊野に住む老母のもとに暇乞に下る。その時、熊野の道者から頼朝が高館の義経を攻めると聞き、急ぎ山伏に姿をかえて駆けつける道中、頼朝の寵厚い梶原景時に捕えられて、頼朝の前に引き立てられる。主君義経の心情を慮せず訴える重家を、頼朝はその剛腹に感じ入って、召し使わんとする。しかし一旦は承諾してあざむき、酒宴の後再び逃がれて、奥州高館の義経のもとに駆けつけると言うもの。物語の前半が母と別れて戦場に赴く、中国、日本における例をあげて母と問答をかわし、後半は捕えられた重家が義経の野心のない事、梶原との逆櫓の意見のことなどで頼朝との遣り取りなどで構成される。この逆櫓のことは、先行の『平家物語』（巻十一）、『源平盛衰記』（弥巻第四

十一）に典拠があり、また詞章の「みちのくのちかの塩竈」は『続後撰集』（巻十二恋二）読人しらず、「陸奥の千賀の塩竈ちながらからきは人に逢はぬなりけり」の歌に基づく、それぞれその影響が窺える。かかるに判官ものを扱った作品のうち、最も影響をうけたと目される『義経記』との関係は、同書において重家は「鈴木三郎重家高館へ参る事」の章段に、前章段にも何等の記載もなく突如として現われる。物語の構成上如何にも唐突であるが、高木本『義経物語』の場合は、「さても物のははれをとどめしは、鈴木三郎重家にとどめけり、都の片辺にありけるが、判官殿を恋ひ偲び奉り、遙々の道の程を分け下り、七十五日に下り着き、今日の合戦に一番に討死仕りけるとかや」と一応合戦のため、都から重家が駆けつけて来たことの説明がある。又この章段に「年比の妻子をも熊野の者にて候ひしを送り候ひぬ、今は今生に思ひ置く事候はず」とあり、いずれも本書の内容とは異なるものである。駆けつけるところが、熊野からではなく、都の片辺からであり、また老母との別れではなく、妻子を送り返すなど、本書とは話の辻褄が合わない。もちろん本書の主題でもある老母との暇乞、頼朝に捕えられる事件についての記載はない。したがって、本書は『義経記』、『義経物語』とは直接的な影響は認められない。要するに同書とは別の義経伝説を背景として生れて来たものと思われる。『義経記』に「そもく和殿は、鎌倉殿より御恩給ふに、世になき義経がもとに來り、幾程なく斯様の事出來ること不便なれ」と頼朝の所領を拝領しながら落日の義経に走って討死した重家に

対する同情、また本書の「誠は重家にはんをたふとも義経の御情に換へまじきものを」と、やはり落日の義経を裏切らない心情などは共通の主題でもある。いわゆる主君と共に討死した家来達の武勇を称え、室町の時代相の反映ともいえる判官最良の庶民感情を背景として作られた作品の一つである。

主人公の鈴木三郎重家は、紀伊国熊野三党(宇井、榎本)の二つ鈴木党の出身。『吾妻鏡』、『玉葉』などの史実には同一人物は見えず、『平家物語』、『源平盛衰記』、『義経記』などの物語、幸若舞曲の『高館』をはじめとして謡本などに弟の亀井六郎重清と共に登場する。つい最近、鈴木姓の絵本家の訴訟で、熊野の鈴木が勝訴して話題ともなった。かつては現在の海南市藤白に鈴木三郎重家の館があったという(紀伊国名所図会五ノ巻 紀伊統風土記巻九)。鈴木家は昭和十七年百二十代嫡流の三郎重吉が亡くなるまで八百年続き、その重吉の邸は、鈴木氏の氏神若一王子社藤白神社が保存するという。『寛政重修諸家譜』巻千五百五十四の穂積氏鈴木の項に「……その男左近将監重邦六条判官為義に属し、戦功あり。法名道哲。其男二人あり、長を庄司重倫といふ。平治の戦に討死す。次は刑部左衛門重善といふ。重倫が男二人あり、鈴木三郎重家亀井六郎重清なり。重家重清共に父討死のち重善に養はれ、伊予守義経につかえ、高館にをいて戦死す。……」と重家、重清の出自を記している。

四、諸本

本書の諸本をあげて両本とを比較し、問題点などについて触れておく。現在知られている伝本は、謡本の外には所伝を聞かない。その謡本を『国書総目録』能の本の項によると次のとおりである。

上掛り謡本

書名	書写年	所蔵者
堀池宗活節付本並同装本(一七番)	永禄頃写	東京大学史料編纂所
淵田虎頼等節付本(一九六番)	大永二〜天正頃写	松井閑花
室町末期節付本十種(三六番)	天文三・永禄三 天正九年写等	鴻山文庫 (江島伊兵衛)
妙庵玄又手沢五番綴本(三〇一番)	慶長二〜五年写	松井閑花
江戸初期節付本各種(一〇三番)	慶長〜寛文頃写	観世元正
光悦流書体六十番綴本『伝光悦自筆謡本』(一八〇番)	寛永頃写	法政大学 能楽研究所
江戸初期第十番綴本(四〇番)	寛永末写	〃
江戸期筆二番綴本『謡曲』(五八番)		東京大学

下掛り謡本

鳥飼道晰節付一番綴本『謡本』(五番)	天正末頃写	国立国会図書館
鳥飼道晰本混綴五番綴本『菊屋家旧蔵五番綴本謡本』(一五〇番)	慶長頃写	法政大学 能楽研究所
慶安承応了随本転写本『了随三百番本』(二六七番)	延宝頃写	鴻山文庫 (江島伊兵衛)
江戸期節付一番綴本『謡本』(三〇五番)	江戸初期写	天理図書館

番外謡本

福王系番外謡本『観世流五百番謡本』(四八五番)	江戸中期写	法政大学 能楽研究所
上掛り番外謡本二種(一七番)	江戸末期写	国学院大学
番外謡本集(六八六番)	〃	天理図書館
浅葱表紙一番綴番外謡本(三九番)		観世元正
下掛り番外謡本五十番本 『謡曲五十番』		宮城県立図書館 伊達文庫
福王流番外謡八百五番本(八〇五番)	江戸末期写	吉田幸一
樋口本番外曲(四〇〇番)	文化文政頃写	田中 允

この外活字本では、元禄二年版謡曲番外四十卷二百番(東京大学図書館蔵)を『謡曲全集下巻』(国民文庫刊行会)に翻刻され、『校注謡曲叢書第一巻』(博文館)には転載されている。

さて、本書表裏見返に記された和歌は、謡本にはなく、本書にしかない特徴でもある。しかしながらその和歌は、本物語の趣旨、その歌意をみても直接の関連性は認め難い。この和歌は、表見返が在原業平の詠歌で『古今集』卷十三恋歌三に「かの女にかはりて返しによめる」と詞書して載せる。歌意は愛情のもっと深いことを男に求め、また裏見返が小大君(三条院女蔵人左近)の詠歌で『新古今集』卷十三恋歌三、『小大君集』に載せ、その歌意は、変わりやすい心を責めたもので、いずれも男女の恋の歌と解される。そこで、この和歌の存在の意味について臆測を試みると、

和歌は散らし書で書かれ、趣向を凝らしたもので、たゞ見返の装飾として筆者の好みで書かれたものではないか。本文との関連があれば、本文の巻頭か、奥書の前に書かれるのが自然でもある。或は、謡本、能本などの次第に相当する七五調の章句または歌などに代わるもので、物語の導入、終演の余韻などの演出上の効果を狙ったものなのか、他にこのような類例がない現時点ではどちらとも断定することは難しい。

次に謡本と比較して本文が謡本と酷似する箇所が認められる。一方謡本との相違点もあり、本書に欠ける部分も認められる。その第一が老母との対面の会話、第二が重家が捕えられ、頼朝の前に引き立てる時の主従の会話、第三が土佐正尊を討った事で重家と頼朝との会話の発端、第四が重家が逆櫓は逃げの手段と答える箇所、第五が頼朝が家来に重家の縄を赦して召す時の会話など、主に段替わりに該当する問答の部分である。しかし、物語の筋の上からはほとんど影響はなく、また書写の際の欠落とも考えられない。もともと親本にも欠いていたものと推測される。この作品が作られたと目される室町時代においては、謡曲詞章、特にセリフの部分に流動性があったことを考え合わせれば、謡本の場合には、舞台上演の演出的な効果を狙って、徐々に書き加えられたのではあるまいか、したがって本書を省略本とみるよりも、むしろ原型に近い形態を遺しているものと思われる。

この外に本書の性質を知る上で見過すことのできない点として、問答の交代を示す箇所「へ」の鉤印が付され、話者の書き入れがあるこ

と、また、「一部の章句間に」。「上」の脇注があることである。これらの記号は、物語草子類にはあまり見られず、歌謡、謡本などによく見られるものである。しかも「上」の注記は、謡本の「同上」の注記の位置と一致する。この「上」が謡本の上げ歌の意、節付けなどの注記とみるべきか、本書の性質を追求する上で一つの手がかりを与えてくれるものと思われる。本書が物語的要素を有するというよりも、語り物、謡曲などの芸能的な要素を多分に有するものとみる所以でもある。

対校本の鳥飼本については、「国立国会図書館蔵 貴重書解題第九卷—古写本の部第二—」（昭和五三・八・二五刊）に詳しい。こゝでは簡単に記しておく。

『謡本』（張良・羅城門・すゞき）の一番一冊五番五冊（W A16—119）、江戸初期写、伝鳥飼（車屋）本。綴葉装。大きさは縦二四・三糎、横一八・八糎。表紙は藍色地に金泥の花弁文様、見返しは、金切箔散らし、現装では一番一冊であるが、もとは五番五冊合綴本の綴葉装であったと目されている。料紙は鳥の子紙、題箋、外題はなく、本文巻頭に「すゞき」と曲目を題す。本文は墨付十一枚、一面七行書き、一行十八字前後で記す。巻末に「節付早」と記し、「鳥養休十」（重郭）及び巻頭第一紙右下部に「鳥養久允」（重郭）の二種の墨印があるが、久允、休十なる人物が何人か不明。虫損は近年補修されたもの。本書の筆跡、押印等の疑問については、前掲の『貴重書解題』において論及されている。

凡 例

- 一、当部蔵橋本家旧蔵本を底本とし、国立国会図書館蔵鳥飼本『謡本』を右脇に（ ）を付して対校した。
- 一、対校にあたっては、両本の漢字、仮名等の文字の相違及び対校本にある節付の旁注は省略した。
- 一、原本の漢字、仮名等は、便宜通行の文字に改めた。
- 一、便宜読点を付し、改行は「」で示し、また丁数は「」に旁注した。
- 一、見返の和歌は、散らし書であるが、二行に書き改めた。

（石塚一雄）

鈴木三郎重家物語

「外題」 聞 書

「見返」あさみこそ袖はひつらめなみたかは

みさへなかるるときかはたのまん

（か）様（候）者、（内）（ナ）
そも／＼これは、はうくわん殿の御中につかへ」申、すゝ

きの三郎（重家）にて候、（判官殿は頼朝御中たかはせ給候間 奥） 我きみ、（申へく）（を）
ひてひ

ら」をたのみ御ひらき候あいた、（ナ）（シ）
我を、御ともにて候ほと
に、（ナ）（シ）
ふるさとにるふほ一人もちて候し、（ナ）（シ）
か、このあいた」大

事にいたわりつかまつり候あいた、おとゝにて候かめひの
 六郎を御ともさせ、日数の御いとま申、このあいたき
 しうに又時々おくよりもくまのへまいり候たうしや
 申候は、よりともよりもたかちをせめ申され候あいた、
 ろふほにいとまをこひくたらはやとそんし候、
 候ものに委申さはやと存候 重家か参りて候 母へ重家とはちかうわたり候へ してへ畏て候 いかにか
 申候 此はと御心ちはいかやうに御座候そ 母へさん候風の心ちはきのふより少心も能候ほとに御心安お
 もひ候へしてへ何とよく御座候と仰候歎 かゝる祝着なる事こそ候ね さては御心安存候 又只今おくよ
 り熊野へまいる道者の申候は 我君たかちに御座候を 近日頼朝よりせめ申さるへきよし申候程に
 そき罷下御一大事をも見とけ申へし 只今は御いとまこのためにまいりて候 母へ判官殿には 母へこ
 れはおもひよらぬ事なり、御身はいとま申はらにそ候なり、
 そのうへよきつわ物あまた御とも申たり、またかめいの六
 郎は、おことの大きくわんなれば、あすをもしらぬは、
 かいのち、いかてかみすてたまふへき、しけいへへけに、
 御こと「はりにて候へとも、はゝのめいをそむき、しうの」
 御とも申たる、そのたとへの候し、てんちくには「ウしやに
 こくのくわん人、おひたるはゝをふり」すてゝ、またたこくに
 むかいしなり、母へさて大こくには、たかありしそ、しけい

へへかうそのつわ物はんくわひは、はゝの衣をぬきかへて、
 こうもんにむかいしに「いまゝてもほるとは、はゝの衣なり、
 母さて「わかつてうのたとへにも、さやうの事のありしよ」な
 う、すゝなかくの事、あふしうのさたうつき」のふは、
 はゝをこきやうにとゝめつゝ、さいこくの「御とも申なり、
 母へけに「このうへは、いまゝても見きゝの事の身のう
 へに、母へあふしうのはて「よりとをきにしのうみ、やし
 まによす」るうらなみの、うちしにしてこそつきのふか」そ
 のなをあけし物のふの、やたけ心にも「うかむやなみたなる
 らん、いまをおやこの「ちきりのかきりそとおもひしけいへ
 か、ゆくへきかたをたにおもひわきまへぬこゝろかな、「三
 へはゝ、そのときしけいへに、御身のおとゝのかめいの六郎」
 にことつてすへしかりそめに、わかれしちは「くろかみの、
 あからさまに思ひしにいわんかたなや」、おもひやれ、心は
 そらにみちのくの、ちかのしを「かまちかからは、なとやみ
 もし見えざらんと、「思ひかねはまちとり、ねをのみなくとか
 たるへし、。上いとま申てさらはとて。行はなくさむかたも」
 あり、とまるそなこりはゝきゝの、ありとみへ」つる思ひこ

の、ゆくあともとをくなりはてゝ、「たちわかるゝそあわれなり、いかに」すゝきの三郎しけいへ

重家を生とつて候か 何とつかまらふするそと申候 わきへこなたへつれて来り候へ へ畏て候 急て御前にひかせて参れとの上意にて有そ へ畏て候 わきへ鱸の三郎重家とは汝か事歟

くはんとの「よりともやしんあるにより、おのれさへ」て

んのみにかゝりいけとられたり、何事」にてもあれ、おもひおく事あらは、まつすくに」申せ、おほせかしこまれし

候、しけいへか事は、「はうくわん殿に、かたときもはなれ申さぬみ」にて候か、ふるさとにろうほの候か、もつて

の「ほかにいたわり候ほとに、御いとま 申、このほとは」きしうに候、

路次にておめくといけ」とられ申、たゞいまおもはずに御

まへにめし」いたされ、かうへをはねられ申へき事、ゆみとつてにほん一のめんほくに候ほとに、何事」にても候

へ、おもひおくこと なく候、

やなをすと存せし如に 土佐正存討し事はなんほうふしきの事ぞ してへ何と我君の御野心と候哉 先は

心をしつめてきこめされ候へ

我きみ」はうくわん殿よりとももの御大く

はんとして、「おにかみよりもなをおそろしく候へいけ」をほろほし、たいしやうむねもりふしを」いけとり申し候、

御下 候所に、めしうとを」はうけとり、はうくわん殿おはこしこへより」なきけなくおつかへし申されし事は」候、その

ときかめい、かたおか、むさしはうと申」あふれ物、かう申しけいへをはしめとして、「四ッいさかまくらにみたれ入て、

さんしんのくちため」さんと申ける時、はうくわんしんきやうのれい」おもんしたまい、ひきつれみやこへのほりたま」

いし事、やはり御やしんにては候へき、それ」にまさしく御きやうたい、ほろほし」申さるゝとも、御一もんに、御は

たを、そへられ、そのほかなある侍ともにおほせつけらるへ」き、たれかしらぬ、あのとさめは、こんわう丸」と

いひしわつはほうしになりたれば」御所のましろひゆるされ申、たる」にてこそ候へ、かやうに人かすならぬ身にて、」は

うくはん、うつてのたいしやうにたまはり、ねらひ」申、

てんはつをかふむりたるは、よりとももの、あくきやうは、

たちまちに御ひか事と」ゆふかほの、けんしの、たい

しやうのうつてには「ふそくなり」と、きやうわらへ、わらひしはた「五ツきみの御ふそくなりと申なり、」

よりとも「へいかにさて、何とて」かちはらさかのい

けん」は、よしつねはきらひけるそ、すきへさてかち」わらは、これにて何とか申候つる、」よりとも「かちわらこれにて

申しは、へいけははや」すへになるとはおもへとも、

さいこくにむね」とのつは物おし」ことにふないく

さてう」れんしたるらん、みかたもそのてにてなく」て

はかなふまし、ふねにさかるをたて」むまのかけひ

きのやうにとこそ申せ」しよな」

に出る時 われ人一所とこそおもへとも 其きはとなればふしきにさはなき物也 さかるはひとへににけま

うけ也 よの舟には逆ろをもたてよ

つねかふねにおきてはにけれふ」けんはかなふましきとおほ

せ候は、やはり」御ひか事にては候へき、それにまさし

き」御しうをちくるひにたとへ申たる」かちわら かあ

つこう、なんほうそん」六ツくわひなる物に候そ、よりとも「へい

やさやうにあつ」こうなんと候は、はうはひとものはいわさ

り」しよ、すきはうはいとも、ときのけん」おそれ申

さぬはことわりなり、まさしくはうくわんを

はいのしむむしやめ」とくたし身のをき所なきま」

に、とかなきよしつねにさんそう」申つけ、うしないたまふへ

心ある頼朝の御こと、あつはれよりどもの御うんの」すへになりた

まい候ごさんめれ、かやう」に申事 おそれおしく候へとも、

とても」御所にてちうせられ候へき、しけいへ」かみはとて

もありぬへき、たかへす」かへすもよりどもの、御ふそく

なり」ける御ころ、上あらもとかしの御心や」とて、さめ

くとなきければ、御まへに」セウありししよたいめいたち、

かう」なるしけいへかなと、ほめぬ人そなかり」けり、きみ

もあわれとおほしめし、かり」きぬの袖を御かほにをしあて

たまへは」人くもみなかんるひをなかしけり、く、

いかに誰かあるへ御前に候 わきへ重家をかたわらへひかせ候へへ畏て候 余彼の大かうの者にてあ

る間 繩をゆるし召つかうするにてあるそ 其由申候へへ畏て候 いかに鱧殿に申候へ何事にて候そ

へ君よりの御定にて候 余に大かうの人にて渡候程に 繩をゆるひて召つかはれうすと仰出され候

してへ畏たるを御申候へへいかに申上候 上意の通重家に申聞せて候へは畏たる由申候 わきへさらは

鳥帽子直垂にて 急てこなたへ来れと申候へへ畏て候 いかに重家に申候 急て急はし直垂にて御前に御

参りあれとの御事にて候 してへ畏て候

けにことわりもしけいへか、く、い

ま「しめ^(せ)ときゆるし、いそぎ御まへにめされ」つゝ、きみよ
りくたる御さかつき、「^(して)とりつたへたるあつさゆみ、はるく」
たひのうきおもひを、わするゝいまの「しゆゑんかな、^(わき)
いかに重家一道の達者は万事に渡るといへり 一さし舞候へ 忘る今の酒宴哉」
きみはうちと

けしけ「いへか、く、なさけをかへしおほし」めし、よし
なきよしつねを「たのまんよりも、^(は)よりともにつかへ」よ、
御をんは数くねかいのまゝに「おこなふへし^(き)との御しやう
なり、「ハッ

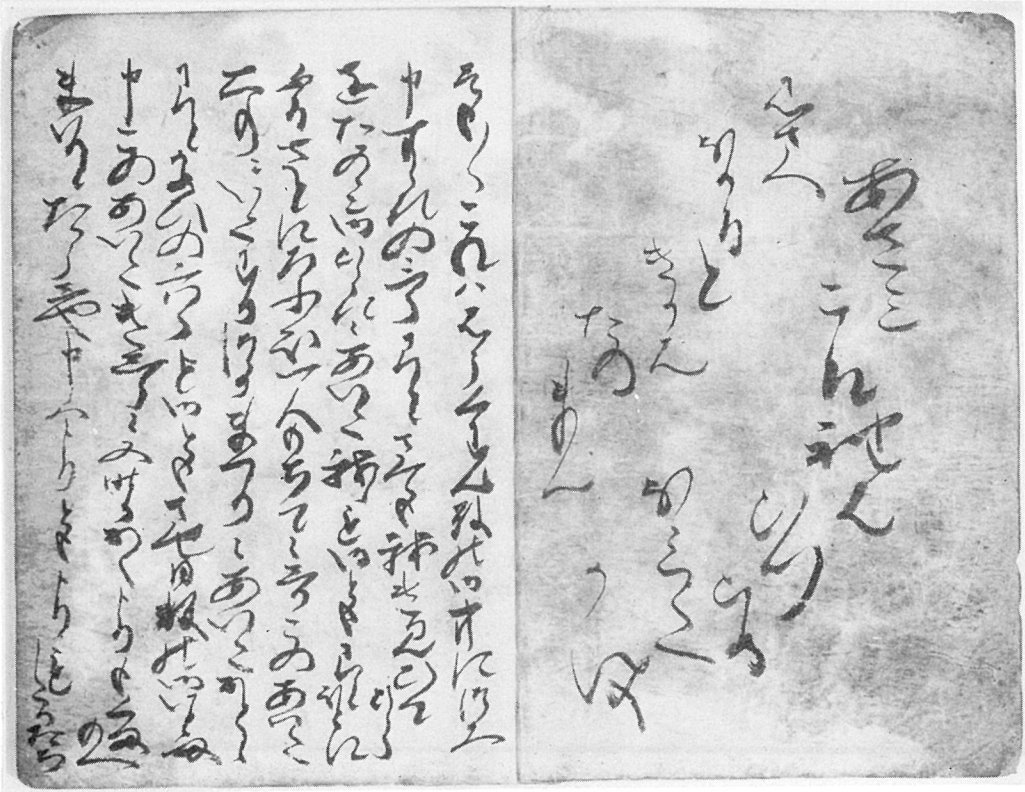
す^(して)おほせか^(は)しこまつて、きみをたは「かりりやうしやう申、
御まへをたち」しかは、きみも御しん所にいらせ「たまへ^(あ)
は、^(して)このときしけいへ一人ことに、まことはしけいへに、
にほんをたふ^(あ)」とも、よしつねの御なさけに^(は)かへ「ましき
物をと、おもへはよしなや、^(は)なかい、むやくとて、ひたゝ
れ、ゑほし」かしこにぬきすて、あみかさ」とつてうちかつ
き、いのちたす「かり、みちのくさして、くたり」けるこそ
うれしけれ、^(ナシ)

わけみえかたくおかしく候へく候」
ほんのまゝに」

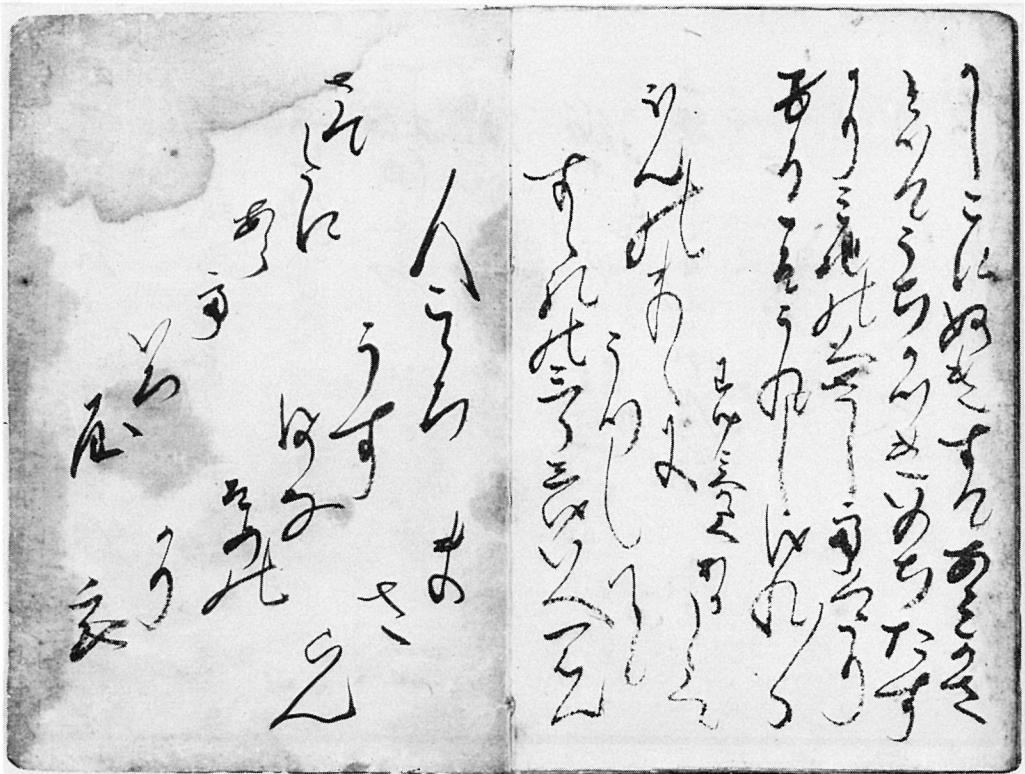
うつし候已上」

すゝきの三郎しけいへてん「九ウ

「見返」人こゝろうすはなそめのかり衣
きてたにあらでいろやまさらん



聞書 卷頭



同上 卷末